Ⅱ　時代物にみるうちかけ

歌舞伎の芸題は、大きく時代物・世話物・お家物の３つに分類されます。地歌舞伎では時代物、お家物といった公家や武家の社会を扱った芸題が多く上演されていました。それには、「臣に忠、親に孝」という江戸幕府の政治的意図の反映、衣裳美への庶民のあこがれ、といった面があったようです。

時代物の裲襠は、目を見張る程の奢侈性の他にも、大きな意味を含むことがあります。「太閤記十段目」操、「実録先代萩」政岡などには、文様に深い意味が込められています。



濃紺繻子地金繍流水に薪散文

（のうこんしゅすじきんしゅうながれみずにまきちらしもん）

この裲襠には、金糸で薪と流れる水を随所にあしらいデザインされています。また、濃紺色の地に金糸、フキと袖口の緋色、と大変目を引く色使いがなされています。

華やかさを競い見せるために金糸がしばしば使用されています。金糸はどれも１本の金糸を折り返して縫い付けてあり、繋がっています。金糸とは、撚りのない糸を何本か芯にして、金箔を貼付した和紙で巻いてあるものです。芯にする糸の本数によって、「○本通し」の金糸と呼称されます。この通しの本数により、力強さから繊細さまで多彩な表現が可能となります。

黒緞子麻の葉蝶地文地金繍藤棚唐草文

（くろどんすあさのはちょうじもんじきんしゅうふじだなからくさもん）

黒地に藤棚と唐草が細い金糸で描かれ、すっきりとして品のある裲襠です。細い金糸と程よい余白が品格を高めます。

時代物に登場するお局でも、若く、位の高い者の役柄に使用されたと考えられます。





黒繻子地金繍雪持竹に南天文
（くろしゅすじきんしゅうゆきもちたけになんてんもん）

黒地に雪に竹、南天が描かれた裲襠は、「実録先代萩（じつろくせんだいはぎ）」に登場する乳母政岡（浅岡ともいう）の役衣裳です。

「実録先代萩」は、仁木弾正と妹八汐が若君鶴千代の命とその乳母政岡の失脚をねらう芸題です。「御殿の場」では、八汐がすすめた毒入り菓子がもとで、政岡の子千松が殺されます。政岡は我が子の死にじっと耐え、若君鶴千代を守ります。政岡が裲襠で鶴千代を隠し、見せ場を盛り上げます。

時代物における裲襠は、室内で羽織る着物という以上に、演目の中でその人物の人柄や家柄を表わしたり、所作においても重要な役割を果たしています。

この裲襠は、竹を太く多くし、南天を入れて、一層映えるようにデザインされています。

黒繻子地金繍竹に雀文
（くろしゅすじきんしゅうたけにすずめもん）　江戸時代末期

所蔵：美濃歌舞伎博物館



この裲襠も、「実録先代萩」政岡の役衣裳です。

本来、政岡の決まり衣裳は、竹に雀が飛んでいるデザインです。この芸題のモデルとなった仙台伊達家の家紋にちなんだ文様で、政岡の役を象徴しています。

それを基本としながらも、役者の好みや豪華志向によって文様がさまざまにアレンジされます。雀を多くしたり、南天を加えたり、竹を増やしたりします。この裲襠は、すっと伸びた竹に雀が飛び交っています。前掲の裲襠は、竹の本数を増やし南天を入れ、雀を省いています。



深緑地錦雲丸龍鳳凰文
（ふかみどりじにしきくもまるりゅうほうおうもん）

時代物に登場する高位で、比較的年齢の高い大奥女性の役柄に使われた裲襠です。

高位を示す龍と鳳凰の文様が使われています。

時代物の裲襠は通常、未婚者には刺繍柄、既婚者には錦の裲襠を用います。